〔原 著〕

対人感情が援助行動ならびに非援助 行動の原因帰属に及ぼす影響¹⁾

竹 村 和 久 高 木 修
光華女子短期大学 関西大学

Influence of interpersonal affect on causal attribution for helping
and non-helping behaviors

KAZUHISA TAKEMURA (*Kohka Women's Junior College*) OSAMU TAKAGI (*Kansai University*)

The main purpose of the present study was to investigate the influence of interpersonal affect on causal attribution for helping and non-helping behaviors. Each subject, 168 university students in all, was randomly assigned to one cell of a 3 (positive, neutral, and negative interpersonal affect) $\times$ 2 (emergent and non-emergent situations) $\times$ 2 (sex of a potential recipient) $\times$ 2 (sex of a potential helper) design. The subject were asked to rate the likelihood of 25 different helping motives as a cause of helping behavior and the likelihood of 26 different non-helping motives as a cause of non-helping behavior.

Major findings obtained were as follows:

(1) Subjects in the positive and neutral interpersonal affect conditions attributed their helping behavior to internal, stable and general causes. They also attributed their non-helping behavior to external, unstable, uncontrollable, and specific causes.

(2) Subjects in the negative interpersonal affect conditions attributed their helping behavior to external, unstable, and specific causes. They also attributed their non-helping behavior to internal, stable, controllable, and general causes.

(3) The influences of the interpersonal affect on causal attribution was generally stronger than the other factors. Interaction effects between the interpersonal affect and the other factors were observed.

Key words: causal attribution, interpersonal affect, causal dimension, helping behavior, non-helping behavior, prosocial behavior.

問 題

人が他者と相互作用する際、初対面等の場合を除いては、好意や嫌悪などの対人感情を基礎にしていることが知られている(Bersheid, 1985; 斎藤, 1986)。援助行動の研究においても、他者に対する感情が援助行動やその

意図に影響を及ぼすことが見出されている(Baron, 1971; Regan, 1971; 斎藤, 1985; 竹村, 1988)。すなわち、これらの研究は、潜在的被援助者に潜在的援助者が肯定的感情(好意的感情)を抱いている場合、援助行動の意図形成や援助行動の実現が促進され、潜在的被援助者に潜在的援助者が否定的感情(嫌悪的感情)を抱いて

1) 本研究の実施にあたり、同志社大学文学部小嶋外弘教授、山内弘継教授、岡市広成教授、鈴木直人助教授、そして被験者になっていただいた同志社大学の学部学生の皆様にご協力いただいた。また、3名の覆面審査委員から適切なご指摘をいただいた。記して謝意を表す。

いる場合、それらが抑制されることを示唆している。

この対人感情の効果は、援助行動を規定する他の要因に比べてどの程度強いものなのだろうか。援助行動のこれまでの研究によると、潜在的被援助者の性、潜在的援助者の性、緊急か非緊急かというような状況的要因は、援助行動の生起に影響を与えることが知られている (Bar-Tal, 1976; Eagley & Crowley, 1986; 中村・高木, 1987)。竹村 (1988) は、第1実験において、対人感情、潜在的被援助者の性、潜在的援助者の性の3要因が援助行動意図に及ぼす効果を検討したところ、交互作用を含む3要因モデルの説明分散のうち、対人感情の主効果が約96%の寄与率を持っていることを明らかにした。また、この研究では、対人感情の主効果の行動意図データに対する説明分散率 (ω^2 係数) で約46%であることも明らかになっている。これらのことから、対人感情の行動意図に及ぼす影響は、他の2つの要因との相対的な関係においても、行動意図の説明分散率においてもかなり大きいことが示唆される。

竹村 (1988) は、さらに第2実験において、対人感情、潜在的被援助者の性、潜在的援助者の性の3要因に、当該の状況が緊急か非緊急かという状況要因を加えて、援助行動意図に及ぼす効果を検討した。その結果、交互作用を含む4要因モデルの説明分散のうち、対人感情の主効果が約70%の寄与率を持っていることが明らかとなった。また、この研究では、対人感情の主効果の行動意図データに対する説明分散率 (ω^2 係数) が約32%であることも明らかになっている。これらのことから、対人感情の行動意図に及ぼす影響は、他の3つの要因との相対的な関係においても、行動意図の説明分散率においてもかなり大きいことが指摘される。これまでの援助行動の研究においては、Latané & Darley (1970) の古典的研究にみられるように、状況的要因が意思決定過程や行動に及ぼす効果が強調される傾向にあった。しかし、潜在的被援助者への対人感情は状況的要因より一層強い効果を持つことが示唆されることから、対人感情と援助行動との関連をさらに検討することが重要であると考えられる。

本研究は、潜在的被援助者に対する肯定的 (好意的) 感情や否定的 (嫌悪的) 感情が潜在的援助者の援助行動ならびに非援助行動の原因帰属の次元にどのような影響を及ぼすかを検討することを主目的にしている。本研究で取上げる原因帰属の次元は、統制の所在 (locus of control)、安定性 (stability)、統制可能性 (controllability)、一般性 (globality) の4つの次元である。まず、統制の所在の次元は、Rotter (1966) により最初に提案されたものであり、原因が人物の内側にある内的な

ものか人物の外側にある外的なものかという性質に関する次元のことである。つぎに、安定性の次元は、Weiner, Frieze, Kukula, Reed, Rest, & Rosenbaum (1971) の達成動機研究において最初に提案されたものであり、原因が時間を越えて安定的であるか不安定的であるかに関する原因帰属の次元のことである。つぎに、統制可能性の次元は、Heider (1958) や Rosenbaum (1972) の意図性 (intentionality) の次元を Weiner (1979) が再概念化したものであり、その原因が行為者自身によって統制可能か統制不可能かに関する原因帰属の次元のことである。最後に、一般性の次元は、Abramson, Seligman, & Teasdale (1978) が、学習性無力感 (learned helplessness) を説明するために提唱した次元であり、原因が状況を越えて一般的であるか特殊であるかに関する原因帰属次元である。

竹村・高木 (1987) は、高木 (1983, 1987) が被験者の自由記述から採取した25種類の援助動機および26種類の非援助動機と、上記の4種類の原因帰属次元との対応関係を明らかにした。彼らは、各動機項目に関して各原因帰属次元のウェイトを被験者に5段階尺度で評定させ、その評定値を分析し、動機項目と原因帰属次元との対応関係を検討した。本研究では、竹村・高木 (1987) の研究によって得られたウェイト (被験者の評定平均値) をもとにして、援助動機や非援助動機に関する具体的な質問項目への回答から、原因帰属次元得点を算出することにした。これは、直接原因帰属次元を質問するのではなくより具体的な複数の動機項目から原因帰属次元得点を算出することに、以下の利点があるからである。すなわち、(1) 複数の動機項目得点の線形加重和によって原因帰属次元得点を求めることが測定信頼性を高めることになる、(2) 被験者の自由記述をもとにした動機項目を用いることによって、被験者の回答の際の心的負荷をより低減させることができる、と考えられるからである。

本研究は、潜在的被援助者に対する肯定的 (好意的) 感情や否定的 (嫌悪的) 感情が潜在的援助者の援助行動ならびに非援助行動の原因帰属にどのような影響を及ぼすかを検討することを主目的にしているが、さらに、援助状況の性質、潜在的援助者の性、潜在的被援助者の性の要因の効果も加えて検討する。なお、状況の要因については、高木 (1982) の援助状況の分類学的研究を参考にして、社会的規範・個人的規範の指示の程度が高く援助出費の高い緊急状況 (潜在的被援助者が街で誰かに乱暴されている状況) と、社会的規範・個人的規範の指示の程度が低く援助出費の低い非緊急状況 (潜在的被援助者が雨の日に傘を持っていないで困っている状況) の2

種類を取上げる。

方 法

被験者 本研究の被験者は、4年制私立大学で一般教養の“心理学”を受講している学部学生168名（男子84名、女子84名）であった。彼らは、“心理学”の受講中に“社会的行動の意識調査”と称する実験に募集され、1987年1月初旬から下旬にかけて、心理学実験室内で小集団での実験に参加した。

実験計画 援助行動と非援助行動のそれぞれについて、対人感情、状況、潜在的被援助者（対象者）の性、潜在的援助者（被験者）の性という4要因が独立変数となる。対人感情は、肯定的（好意的）感情、中性的感情、否定的（嫌悪的）感情の3種類であり、状況は、「対象者が雨の日に傘を持っていないで困っている状況」（非緊急状

況）と「対象者が街で誰かに乱暴されている状況」（緊急状況）との2種類である。したがって、本実験は、 $3 \times 2 \times 2 \times 2$ の被験者間4要因計画である。被験者は、各群に7名ずつ無作為に割当てられた。

質問項目 援助動機項目として、高木（1983）の25項目を、非援助動機項目としては、高木（1987）の26項目を使用した。本研究で用いた援助動機項目をTable 1に、非援助動機項目をTable 2に示した。これらの動機項目に関しては、その項目の各内容が各行動の生起理由にどの程度なると思うかを、「非常になる」、「少しなる」、「どちらともいえない」、「あまりならない」、「まったくならない」の5段階尺度によって被験者に評定させた。

なお、潜在的援助者（被験者）の性を除く3つの実験要因は、叙述された場面の内容を変えることで操作された。援助行動に関する一例をあげると、次のようになる。

Table 1 Mean ratings of items for helping motives on causal dimensions

Items for helping motives	Locus of control	Stability	Controllability	Globality
1. 直接援助を要請されたので	-.34	.64	.02	.58
2. その時、気分が良かったので	1.40	-1.07	.86	-.11
3. 自分以外に誰もそこになかったので	-1.14	.35	-.64	.15
4. お互いに助け合わねばならないと思ったので	.90	.59	.38	.69
5. 援助する能力や資格が自分にあると思ったから	1.29	.54	.71	-.23
6. 今までに援助したことがあったから	.69	-.02	.59	.05
7. 援助に必要なコストが小さかったので	-.32	.24	.76	.41
8. (相手が) 自分の知っている人だったから	.56	.96	-.39	.29
9. 他の人が援助していたので	-.91	-.13	-.04	.31
10. 無意識に	.87	-.54	-.32	.00
11. (相手が) 好きな人だったから	1.40	.82	.07	.03
12. 援助が必要だと思ったので	.61	.71	.19	.83
13. (相手が) 好ましい特徴を持っていたので	.63	.11	.36	-.24
14. 援助を求める原因がむしろ自分にあり、援助の責任を感じたから	1.16	1.17	-.59	.04
15. (自分が) 思いやりのある愛他的な人だから	1.29	.39	.46	.24
16. 他者の目が気になったので	-.89	-.19	-.58	.24
17. 援助しないためにこうむるコストが大きかったので	-.73	.42	-.54	-.09
18. 誰一人として援助しようとしなかったで	-.90	.06	-.37	-.05
19. 気の毒に思ったので	1.01	.11	.31	.56
20. (相手の) 近くにいたので	-1.01	.03	-.29	.34
21. 報酬や返礼が期待できたから	-.03	.03	.62	-.06
22. 今までに援助に成功して良い気持ちになったことがあったから	1.09	-.19	.66	.01
23. 援助する義務が自分にあると思ったから	1.21	.87	-.20	.25
24. 今までに援助されたことがあったから	.47	.14	-.14	.31
25. 何か良いことをしてみたかったから	1.10	-.46	.66	.09

Note. High scores on these causal dimensions indicate that the motive is perceived as internal, stable, controllable, and global.

『あなたが特に好きでも嫌いでもない、あなたの知合いの人（あなたと同性）のことを思い出して下さい。その人を仮にYさんとします。そして、ある日、Yさんが街で誰かに乱暴されているのを見たあなたは、Yさんを助けるために警察に通報してあげたとします。さて、あなたは、以下の項目が、あなたのYさんに対するその行為の動機や原因にどの程度なると思いますか。「非常になる」から「まったくならない」までの5段階で評定して下さい。』

これは、援助行動に関する、中性的感情・緊急状況・同性の条件にあたる（なお、援助者と被援助者の関係は、同性か異性かということで被験者に教示したが、分析の際には、男性か女性かというカテゴリーで検討している）。

また、非援助行動に関する一例をあげると、次のようになる。

『あなたが特に好きでも嫌いでもない、あなたの知合いの人（あなたと同性）のことを思い出して下さい。その人を仮にYさんとします。そして、ある日、あなたは、Yさんが街で誰かに乱暴されているのを見たのに、Yさんを助けるために警察に通報してあげなかったとします。さて、あなたは、以下の項目が、あなたのYさんに対するその行為の動機や原因にどの程度なると思いますか。「非常になる」から「まったくならない」までの5段階で評定して下さい。』

以上の例は、非援助行動に関する、中性的感情・緊急状況・同性の条件である。

Table 2 Mean ratings of items for non-helping motives on causal dimensions

Items for non-helping motives	Locus of control	Stability	Control-lability	Globality
1. その時、気分が悪かったので	1.43	-.76	.26	-.38
2. 目立つのが恥ずかしかったから	1.16	.09	.48	.57
3. 今までに援助を求めて拒否されたことがあったから	.54	.09	.26	.14
4. (相手から) 遠く離れていたの	-1.22	.34	-.08	.70
5. 誰一人として援助しようとしなかったの	-.80	.26	.15	.52
6. 自業自得であり、自分に関係ないと思ったの	.89	.27	.41	.07
7. 他者がどのように思うか気にならなかったの	.89	.22	.63	.09
8. 援助しないためにこるむるコストが小さかったの	-.20	.31	.27	.36
9. (相手が) 自分の知らない人だったから	.03	.33	.33	.46
10. 援助が必要だと思わなかったの	.72	.71	.16	.78
11. 自分以外にも何人かそこにいたので	-1.09	.31	.09	.67
12. 自分の難儀は自分で切り抜けるべきだと思ったの	.96	.21	.42	.06
13. 報酬や返礼が期待できなかったから	.14	-.11	.46	-.04
14. (自分が) 思いやりのない利己的な人だから	1.32	.01	.13	-.17
15. 関わりたくなかったから	1.17	.67	.20	.70
16. 援助する能力や資格が自分になかったから	1.17	.31	-.01	.04
17. 今までに援助に失敗して、いやな気持ちになったことがあったから	1.06	.16	-.21	-.16
18. 面倒だったから	1.15	.19	.40	.34
19. 今までに援助したことがなかったから	.37	-.12	.34	-.09
20. (相手が) 好ましくない特徴を持っていたの	.16	.13	.03	-.04
21. 直接援助を要請されなかったの	-.71	.12	.11	.46
22. (相手が) 嫌いな人だから	.61	.43	-.04	.09
23. 他の人が援助していたの	-1.00	.46	-.04	.49
24. 援助に必要なコストが大きかったの	-.41	.72	-.25	.59
25. 援助する義務が自分になかったの	1.04	.65	.16	.49
26. おせっかいと思われたくなかったから	1.01	.38	.28	.40

Note. High scores on these causal dimensions indicate that the motive is perceived as internal, stable, controllable, and global.

手続 教示を徹底するために、実験は2名から10名の小集団で実施した。被験者は、社会的行動の意識調査と称する実験に参加し、ある場面の叙述とその内容に関する質問項目を含んだ用紙を配布され、叙述された場面についての内容をよく続んだ後、各質問項目に回答するように教示された。

実験の要因は、潜在的援助者（被験者）の性の操作を除いて、実験者の教示と叙述された場面の内容を変えることで操作された。以下に各要因の具体的な操作の方法を記す。

(a) **対人感情の操作** 被験者の知合いの人の中から、特定の人物を想起させることによって対人感情を操作した。肯定的感情条件では被験者が好きな人を、中性的感情条件では被験者が特に好きでも嫌いでもない人を、否定的感情条件では嫌いな人を被験者に想起させ、その人物に対する被験者の援助行動ならびに非援助行動を想定させた。なお、そのような人物が被験者にとって想起できない場合は、実験者に報告するようにと教示されたが、想起できないと答えた被験者はいなかった。

(b) **状況の操作** 非緊急状況条件では、「ある雨の日、あなたは、その人がカサを持っていなくて困っているのを見たとして。そして、あなたは、その人にカサをさしかけてあげたとします。」と述べ、緊急状況条件では、「ある日、あなたは、その人が街で誰かに乱暴されているのを見たとして。そして、あなたは、その人を助けるために警察に通報してあげたとします。」と述べた。

(c) **対象（潜在的被援助者）の性の操作** 想起させる人物の性を指定することによって操作した。

結 果

動機項目の各評定に対して、「非常になる」から「まったくならない」までに5点から1点を配点した。つぎに、竹村・高木（1987）の求めた動機項目の原因帰属次元のウェイト（Table 1 および Table 2）を評定得点に掛合わせ、各被験者において援助行動と非援助行動のそれぞれ4つの原因帰属次元得点を求めた。すなわち、各原因帰属次元ごとに、ウェイトと評定得点の積和を算出したのである。各対人感情条件における各原因帰属次元得点の平均値を、それぞれ Table 3, Table 4 に示した。

対人感情、状況、被験者の性、対象者の性という4要因による、原因帰属次元得点の差異を検討するために、次元毎に、4要因を分散分析を行なった。以下、各行動の各原因帰属次元の分析結果を示す。

1. 援助行動の原因帰属

(1) **統制の所在** この4要因の分散分析モデルの決定係数 (R^2 値) は、.268であった。このことは、統制の所在次元への4要因モデルによる分散説明率が26.8%であることを示している。分散分析の結果は、Table 5-1 に示されているように、対人感情の主効果のみが有意であった ($F=14.11$, $df=2/144$, $p<.001$)。5%を有意水準とする多重比較の結果、被援助者に好意的感情を有している群（肯定的感情群）と中性的感情群が被援助者に嫌悪的感情を有している群（否定的感情群）に比して援助行動が内的な原因に基づいていると一層知覚していることが認められた。対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は14.4%であるが、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対的寄与率は53.7%とかなり高く、対人感情の統制の所在次元に及ぼす影響が相対的に大きいことを示してい

Table 3 Mean scores of causal attribution for helping behavior

Causal dimensions	Interpersonal affect		
	Positive	Neutral	Negative
Locus of control	55.69 a	54.22 a	48.63 b
Stability	34.71 a	33.08 a	30.62 b
Controllability	11.61 a	12.33 a	10.86 a
Globality	27.54 a b	27.84 a	26.77 b

Note. Mean scores within each causal dimension without a common subscript differ by at least $p=.05$. High scores on these causal dimensions indicate that helping motive is perceived as internal, stable, controllable and global.

Table 4 Mean scores of causal attribution for non-helping behavior

Causal dimensions	Interpersonal affect		
	Positive	Neutral	Negative
Locus of control	49.59 a	50.93 a	54.48 b
Stability	36.57 a	37.69 a	39.06 b
Controllability	22.47 a	23.53 a	25.23 b
Globality	36.21 a	37.64 a	39.52 b

Note. Mean scores within each causal dimension without a common subscript differ by at least $p=.05$. High scores on these causal dimensions indicate that non-helping motive is perceived as internal, stable, controllable and global.

る。

(2) 安定性 この4要因の分散分析モデルの決定係数(R^2 値)は,.407であった。このことは、安定性次元への4要因モデルによる分散説明率が40.7%であることを示している。分散分析の結果は、Table 5-2 に示されているように、対人感情の主効果が有意であり($F=16.81$, $df=2/144$, $p<.001$)、5%を有意水準とする多重比較の結果、肯定的感情群と中性的感情群が否定的感情群に比して援助行動が安定的な原因に基づいていると一層知覚しているということを認められた。対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は13.8%であるが、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対的寄与率は34.0%と比較的高く、対人感情の安定性次元に及ぼす影響が相対的に大きいことを示している。

また、状況の主効果も有意であり($F=24.45$, $df=1/144$, $p<.001$)、緊急状況の援助行動が非緊急状況の援助行動に比して安定的な原因に基づいていると一層知覚されていることが認められた。さらに、被援助者の性の主効果も有意であり($F=8.54$, $df=1/144$, $p<.01$)、被援助者が女性の場合の方が男性に比して援助行動が安定的な原因に基づいていると一層知覚されていることが認められた。最後に、対人感情と被験者の性の交互作用が有意であり($F=7.12$, $df=2/144$, $p<.01$)、下位検

定の結果、肯定的感情条件では男性が、否定的感情条件では女性がより一層援助行動を安定的と知覚することが認められた。

(3) 統制可能性 この4要因の分散分析モデルの決定係数(R^2 値)は,.256であった。このことは、統制可能性次元への4要因モデルによる分散説明率が25.6%であることを示している。分散分析の結果は、Table 5-3 に示されているように、状況の主効果のみが有意であり($F=21.33$, $df=1/144$, $p<.001$)、緊急状況の援助行動が非緊急状況の援助行動に比して統制可能は原因に基づいていると一層知覚されていることが認められた。状況の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は11.0%であり、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対的寄与率は43.0%とかなり高い。対人感情の主効果は、有意な傾向を示したが($F=2.79$, $df=2/144$, $0.05<p<.10$)、しかし、対人感情の主効果の説明分散率は2.9%であり、相対的寄与率は11.2%とあまり高くない。

(4) 一般性 この4要因の分散分析モデルの決定係数(R^2 値)は,.245であった。このことは、統制可能性次元への4要因モデルによる分散説明率が24.5%であることを示している。分散分析の結果は、Table 5-4 に示されているように、対人感情の主効果が有意であり($F=3.22$, $df=2/144$, $p<.05$)、5%を有意水準とする多重

Table 5-1 ANOVA for locus of control in helping behavior

Source	df	SS	MS	F	ω^2 (%)	ω^2/R^2 (%)
Interpersonal Affect (A)	2	1554.16	777.08	14.11***	14.4	53.7
Situation (B)	1	103.06	103.06	1.87	1.0	3.6
Sex of Potential Recipient (C)	1	21.79	21.79	0.40	0.2	0.8
Sex of Potential Helper (S)	1	41.62	41.62	0.76	0.4	1.4
$A \times B$	2	300.90	150.45	2.73	2.8	10.4
$A \times C$	2	150.42	75.21	1.37	1.4	5.2
$A \times S$	2	219.30	109.65	1.99	2.0	7.6
$B \times C$	1	127.58	127.58	2.32	1.2	4.4
$B \times S$	1	121.65	121.65	2.21	1.1	4.2
$C \times S$	1	54.99	54.99	1.00	0.5	1.9
$A \times B \times C$	2	122.77	61.39	1.11	1.1	4.2
$A \times B \times S$	2	17.63	8.82	0.16	0.2	0.6
$A \times C \times S$	2	9.74	4.87	0.09	0.1	0.3
$B \times C \times S$	1	5.19	5.19	0.09	0.0	0.2
$A \times B \times C \times S$	2	45.91	22.96	0.42	0.4	1.6
Error	144	7931.65	55.08			
Total	167	10828.36				

* $p<.05$

** $p<.01$

*** $p<.001$

Table 5-2 ANOVA for stability in helping behavior

Source	df	SS	MS	F	$\omega^2(\%)$	$\omega^2/R^2(\%)$
Interpersonal Affect (A)	2	474.88	237.44	16.81***	13.8	34.0
Situation (B)	1	345.35	345.35	24.45***	10.1	24.7
Sex of Potential Recipient (C)	1	120.55	120.55	8.54**	3.5	8.6
Sex of Potential Helper (S)	1	2.13	2.13	0.15	0.1	0.2
A × B	2	55.79	27.90	1.98	1.6	4.0
A × C	2	11.59	5.80	0.41	0.3	0.8
A × S	2	201.11	100.56	7.12**	5.9	14.4
B × C	1	1.48	1.48	0.10	0.0	0.1
B × S	1	54.69	54.69	3.87	1.6	3.9
C × S	1	3.98	3.98	0.28	0.1	0.3
A × B × C	2	21.66	10.83	0.77	0.6	1.5
A × B × S	2	1.56	0.78	0.06	0.0	0.1
A × C × S	2	70.67	35.34	2.50	2.1	5.1
B × C × S	1	11.29	11.29	0.80	0.3	0.8
A × B × C × S	2	21.84	10.92	0.77	0.6	1.6
Error	144	2033.53	14.12			
Total	167	3432.10				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 5-3 ANOVA for controllability in helping behavior

Source	df	SS	MS	F	$\omega^2(\%)$	$\omega^2/R^2(\%)$
Interpersonal Affect (A)	2	60.26	30.13	2.79	2.9	11.2
Situation (B)	1	230.28	230.28	21.33***	11.0	43.0
Sex of Potential Recipient (C)	1	4.08	4.08	0.38	0.2	0.8
Sex of Potential Helper (S)	1	4.49	4.49	0.42	0.2	0.8
A × B	2	51.95	25.98	2.41	2.5	9.7
A × C	2	17.09	8.55	0.79	0.8	3.2
A × S	2	11.72	5.86	0.54	0.6	2.2
B × C	1	22.96	22.96	2.13	1.1	4.3
B × S	1	4.22	4.22	0.39	0.2	0.8
C × S	1	3.81	3.81	0.35	0.2	0.7
A × B × C	2	50.58	25.29	2.34	2.4	9.4
A × B × S	2	3.01	1.51	0.14	0.1	0.6
A × C × S	2	6.14	3.07	0.28	0.3	1.1
B × C × S	1	3.55	3.55	0.33	0.2	0.7
A × B × C × S	2	61.57	30.79	2.85	2.9	11.5
Error	144	1554.30	10.79			
Total	167	2090.01				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 5-4 ANOVA for globality in helping behavior

Source	df	SS	MS	F	$\omega^2(\%)$	$\omega^2/R^2(\%)$
Interpersonal Affect (A)	2	34.21	17.10	3.22*	3.4	13.7
Situation (B)	1	40.02	40.02	7.53**	3.9	16.1
Sex of Potential Recipient (C)	1	8.13	8.13	1.53	0.8	3.3
Sex of Potential Helper (S)	1	70.77	70.77	13.31***	7.0	28.4
A × B	2	14.85	7.43	1.40	1.5	6.0
A × C	2	6.98	3.49	0.66	0.7	2.8
A × S	2	44.55	22.28	4.19*	4.4	17.9
B × C	1	2.78	2.78	0.52	0.3	1.1
B × S	1	0.53	0.53	0.10	0.1	0.2
C × S	1	9.97	9.97	1.88	1.0	4.0
A × B × C	2	0.27	0.14	0.03	0.0	0.1
A × B × S	2	10.72	5.36	1.01	1.1	4.3
A × C × S	2	3.38	1.69	0.32	0.3	1.4
B × C × S	1	0.01	0.01	0.00	0.0	0.0
A × B × C × S	2	1.68	0.84	0.16	0.2	0.7
Error	144	765.43	5.32			
Total	167	1014.28				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

比較の結果、肯定的感情群と否定的感情群には有意差はなく、中性的感情群が否定的感情群に比して援助行動が一般的な原因に基づいていると一層知覚しているということが認められた。対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は3.4%であり、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対的寄与率は13.7%とあまり高くない。

また、状況の主効果も有意であり ($F=7.53$, $df=1/144$, $p<.001$)、緊急状況の援助行動が非緊急状況の援助行動に比して一般的な原因に基づいていると一層知覚されていることが認められた。さらに、被験者の性の主効果も有意であり ($F=13.31$, $df=1/144$, $p<.001$)、女性の場合の方が男性に比して援助行動が一般的な原因に基づいていると一層知覚されていることが認められた。最後に、対人感情と被験者の性の交互作用が有意であり ($F=4.19$, $df=2/144$, $p<.05$)、下位検定の結果、否定的感情条件で女性がより援助行動を一般的と知覚する傾向が認められた。

2. 非援助行動の原因帰属

(1) 統制の所在 この4要因の分散分析モデルの決定係数 (R^2 値) は、.236であった。このことは、統制の所在次元への4要因モデルによる分散説明率が23.6%であることを示している。分散分析の結果は、Table 6-1 に示されているように、対人感情の主効果が有意であり

($F=6.51$, $df=2/144$, $p<.01$)、5%を有意水準とする多重比較の結果、被援助者に好意的感情を有している群 (肯定的感情群) と中性的感情群が被援助者に嫌悪的感情を有している群 (否定的感情群) に比して非援助行動が外的な原因に基づいていると一層知覚していることが認められた。また、対人感情と状況と潜在的被援助者の性の3次の交互作用が認められた ($F=6.98$, $df=2/144$, $p<.01$)。対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は6.9%であるが、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対的寄与率は29.3%と比較的高く、対人感情の統制の所在次元に及ぼす影響が相対的に大きいことを示している。

(2) 安定性 この4要因の分散分析モデルの決定係数 (R^2 値) は、.178であった。このことは、安定性次元への4要因モデルによる分散説明率が17.8%であることを示している。分散分析の結果は、Table 6-2 に示されているように、対人感情の主効果が有意であり ($F=4.77$, $df=2/144$, $p<.01$)、5%を有意水準とする多重比較の結果、肯定的感情群と中性的感情群が否定的感情群に比して非援助行動が不安定な原因に基づいていると一層知覚されているということが認められた。また、対人感情と状況と被験者の性の3次の交互作用が認められた ($F=3.58$, $df=2/144$, $p<.05$)。対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は5.4%であるが、 ω^2 係数を

Table 6-1 ANOVA for locus of control in non-helping behavior

Source	<i>df</i>	<i>SS</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	$\omega^2(\%)$	$\omega^2/R^2(\%)$
Interpersonal Affect (<i>A</i>)	2	716.41	358.21	6.51**	6.9	29.3
Situation (<i>B</i>)	1	135.68	135.68	2.46	1.3	5.5
Sex of Potential Recipient (<i>C</i>)	1	106.63	106.63	1.94	1.0	4.4
Sex of Potential Helper (<i>S</i>)	1	37.60	37.60	0.68	0.4	1.5
<i>A</i> × <i>B</i>	2	258.80	129.40	2.35	2.5	10.6
<i>A</i> × <i>C</i>	2	16.95	8.47	0.15	0.2	0.7
<i>A</i> × <i>S</i>	2	182.55	91.28	1.66	1.8	7.5
<i>B</i> × <i>C</i>	1	2.83	2.83	0.05	0.0	0.1
<i>B</i> × <i>S</i>	1	37.62	37.62	0.68	0.4	1.5
<i>C</i> × <i>S</i>	1	2.30	2.30	0.04	0.0	0.1
<i>A</i> × <i>B</i> × <i>C</i>	2	768.46	384.23	6.98**	7.4	31.4
<i>A</i> × <i>B</i> × <i>S</i>	2	12.06	6.03	0.11	0.1	0.5
<i>A</i> × <i>C</i> × <i>S</i>	2	60.92	30.46	0.55	0.6	2.5
<i>B</i> × <i>C</i> × <i>S</i>	1	27.19	27.19	0.49	0.3	1.1
<i>A</i> × <i>B</i> × <i>C</i> × <i>S</i>	2	80.61	40.30	0.73	0.8	3.3
Error	144	7927.43	55.05			
Total	167	10374.04				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 6-2 ANOVA for stability in non-helping behavior

Source	<i>df</i>	<i>SS</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	$\omega^2(\%)$	$\omega^2/R^2(\%)$
Interpersonal Affect (<i>A</i>)	2	173.74	86.87	4.77**	5.4	30.5
Situation (<i>B</i>)	1	1.98	1.98	0.11	0.1	0.3
Sex of Potential Recipient (<i>C</i>)	1	4.42	4.42	0.24	0.1	0.8
Sex of Potential Helper (<i>S</i>)	1	0.15	0.15	0.01	0.0	0.0
<i>A</i> × <i>B</i>	2	18.26	9.13	0.50	0.6	3.2
<i>A</i> × <i>C</i>	2	0.60	0.30	0.02	0.0	0.1
<i>A</i> × <i>S</i>	2	79.68	39.84	2.19	2.5	14.0
<i>B</i> × <i>C</i>	1	1.34	1.34	0.07	0.0	0.2
<i>B</i> × <i>S</i>	1	1.46	1.46	0.08	0.0	0.3
<i>C</i> × <i>S</i>	1	42.26	42.26	2.32	1.3	7.4
<i>A</i> × <i>B</i> × <i>C</i>	2	59.41	29.70	1.63	1.9	10.4
<i>A</i> × <i>B</i> × <i>S</i>	2	130.33	65.16	3.58*	4.1	22.9
<i>A</i> × <i>C</i> × <i>S</i>	2	15.94	7.97	0.44	0.5	2.8
<i>B</i> × <i>C</i> × <i>S</i>	1	0.72	0.72	0.04	0.0	0.1
<i>A</i> × <i>B</i> × <i>C</i> × <i>S</i>	2	38.67	19.34	1.06	1.2	6.8
Error	144	2622.69	18.21			
Total	167	3191.65				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

R^2 値で割った相対的寄与率は30.5%と比較的高く、対人感情の安定性次元に及ぼす影響が相対的に大きいことを示している。

(3) 統制可能性 この4要因の分散分析モデルの決定係数(R^2 値)は、.256であった。このことは、統制可能性次元への4要因モデルによる分散説明率が25.6%であることを示している。分散分析の結果は、Table 6-3に示されているように、対人感情の主効果が有意であり($F=13.54$, $df=2/144$, $p<.001$)、5%を有意水準とする多重比較の結果、肯定的感情群と中性的感情群が否定的感情群に比して非援助行動が統制不可能な原因に基づいていると一層知覚しているということが認められた。また、対人感情と状況と潜在的被援助者の性の3次の交互作用が認められた($F=3.94$, $df=2/144$, $p<.05$)。対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は14.0%であり、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対寄与率は54.6%とかなり高く、対人感情の統制可能性次元に及ぼす影響が相対的に大きいことを示している。

(4) 一般性 この4要因の分散分析モデルの決定係数(R^2 値)は、.207であった。このことは、統制可能性次元への4要因モデルによる分散説明率が20.7%であることを示している。分散分析の結果は、Table 6-4に示さ

れているように、対人感情の主効果のみが有意であり($F=9.22$, $df=2/144$, $p<.001$)、5%を有意水準とする多重比較の結果、肯定的感情群と中性的感情群が否定的感情群に比して非援助行動が特殊な原因に基づいていると一層知覚しているということが認められた。対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数は10.2%であり、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対的寄与率は49.1%とかなり高く、対人感情の一般性次元に及ぼす影響が相対的に大きいことを示している。

考 察

本研究は、潜在的被援助者に対する肯定的感情や否定的感情が潜在的援助者の援助行動ならびに非援助行動の原因帰属にどのような影響を及ぼすかを検討することを主目的にした。さらに、援助状況の性質、潜在的援助者の性、潜在的被援助者の性の要因の効果も加えて検討した。

まず、本研究の方法論的問題点を指摘する。本研究では、対人感情の操作を想起法によって行なった。被験者が特定の対人感情を有する人物を想起できたか否かの操作のチェックは行なったが、それらは被験者の主観的報

Table 6-3 ANOVA for controllability in non-helping behavior

Source	df	SS	MS	F	ω^2 (%)	ω^2/R^2 (%)
Interpersonal Affect (A)	2	217.85	108.92	13.54***	14.0	54.6
Situation (B)	1	18.74	18.74	2.33	1.2	4.7
Sex of Potential Recipient (C)	1	26.62	26.62	3.31	1.7	6.7
Sex of Potential Helper (S)	1	12.12	12.12	1.51	0.8	3.0
$A \times B$	2	20.86	10.43	1.30	1.3	5.2
$A \times C$	2	5.39	2.69	0.33	0.3	1.3
$A \times S$	2	2.38	1.19	0.15	0.2	0.6
$B \times C$	1	3.41	3.41	0.42	0.2	0.9
$B \times S$	1	1.66	1.66	0.21	0.1	0.4
$C \times S$	1	0.31	0.31	0.04	0.0	0.1
$A \times B \times C$	2	63.41	31.71	3.94*	4.1	15.9
$A \times B \times S$	2	5.61	2.80	0.35	0.4	1.4
$A \times C \times S$	2	9.65	4.82	0.60	0.6	2.4
$B \times C \times S$	1	5.64	5.64	0.70	0.4	1.4
$A \times B \times C \times S$	2	5.43	2.72	0.34	0.3	1.4
Error	144	1158.45	8.04			
Total	167	1557.53				

* $p<.05$

** $p<.01$

*** $p<.001$

Table 6-4 ANOVA for globality in non-helping behavior

Source	df	SS	MS	F	ω^2 (%)	ω^2/R^2 (%)
Interpersonal Affect (A)	2	307.70	153.85	9.22***	10.2	49.1
Situation (B)	1	15.28	15.28	0.92	0.5	2.4
Sex of Potential Recipient (C)	1	0.03	0.03	0.00	0.0	0.0
Sex of Potential Helper (S)	1	0.19	0.19	0.01	0.0	0.0
A × B	2	9.43	4.71	0.28	0.3	1.5
A × C	2	1.28	0.64	0.04	0.0	0.2
A × S	2	54.85	27.42	1.64	1.8	8.7
B × C	1	0.00	0.00	0.00	0.0	0.0
B × S	1	0.28	0.28	0.02	0.0	0.0
C × S	1	20.01	20.01	1.20	0.7	3.2
A × B × C	2	65.46	32.73	1.96	2.2	10.4
A × B × S	2	79.69	39.84	2.39	2.6	12.7
A × C × S	2	45.38	22.69	1.36	1.5	7.2
B × C × S	1	3.24	3.24	0.19	0.1	0.5
A × B × C × S	2	24.46	12.23	0.73	0.8	3.9
Error	144	2402.35	16.68			
Total	167	3029.61				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

告に基づくものであり、その妥当性は厳密な意味では必ずしも保証されていない。また、本研究では、被験者の原因帰属のパターンを想定場面での質問紙法を用いて測定した。想定場面での原因帰属パターンが、現実の援助行動あるいは非援助行動の原因帰属パターンと正確に対応しているという保証も必ずしも得られていない。このような方法論的な問題点があるので、結果の一般化を直ちにすることは差控える必要があるが、以下ではこのような方法論的な制限のもとで得られた結果をこれまでの知見を参考にして考察する。

本研究の結果は、対人感情が援助行動および非援助行動の原因帰属に及ぼす影響が比較的強いことを示した。このことは、各原因帰属次元における4要因分散分析の結果や、対人感情の主効果の説明分散率を示す ω^2 係数や、 ω^2 係数を R^2 値で割った相対的寄与率が、比較的高い値を示したことから言えることである。すなわち、対人感情の効果が援助行動の意図形成のみならず原因帰属にも大きな影響を及ぼすことが示唆された。

ただし、対人感情の効果は援助行動と非援助行動との場合でその大きさが必ずしも等しくなかった。たとえば、説明分散率は、援助行動の場合では、統制の所在で14.4%、安定性で13.8%、統制可能性で2.9%、一般性で3.4%であったが、非援助行動の場合では、統制の所在で

6.9%、安定性で5.4%、統制可能性で14.0%、一般性で、10.2%であった。また、寄与率は、援助行動の場合では、統制の所在で53.7%、安定性で34.0%、統制可能性で11.2%、一般性で13.7%であったが、非援助行動の場合では、統制の所在で29.3%、安定性で30.5%、統制可能性で54.6%、一般性で49.1%であった。これらのことは、援助行動の原因帰属と非援助行動の原因帰属が非対称的な関係を示すというこれまでの研究結果（高木・竹村，1984；竹村・高木，1987）と一致するものである。

本研究では、対人感情が原因帰属に及ぼす効果に関して、以下のような知見が得られた。援助行動においては、潜在的被援助者に肯定的感情を抱いている場合や中性的感情を有している場合、潜在的被援助者に否定的感情を抱いている場合に比して、援助行動が内的・安定的・一般的な原因に基づいていると一層知覚していることが認められた。また、非援助行動においては、潜在的被援助者に肯定的感情を抱いている場合や中性的感情を有している場合、潜在的被援助者に否定的感情を抱いている場合に比して、非援助行動が外的・不安定的・統制不可能的、特殊的な原因に基づいていると一層知覚していることが認められた。

なぜこのような結果がでたのだろうか。ここで、否定的感情を抱いている人物への援助行動意図は、肯定的感

情を抱いている人物へのそれより低いこと (Baron, 1971; Regan, 1971; 竹村, 1988) に着目する必要がある。援助行動の原因帰属においては、否定的感情条件の被験者は、あまり起りにくいと考える事象についての原因を推論しなければならないし、非援助行動の原因帰属においては、肯定的感情条件の被験者が同様にあまり起りにくいと考える事象についての原因を推論しなければならないことになる。それゆえに、否定的感情条件の被験者は、援助行動がより外的・不安定的な原因に基づいていると一層知覚し、肯定的感情条件の被験者は、非援助行動がより外的・不安定的・統制不可能・特殊な原因に基づいていると一層知覚したと考えられる。

Weiner (1986) の帰属過程についての理論によると、原因を安定的に帰属することは、将来も同じ結果を期待することにつながり、その行為が失敗した場合、その行為に固執しない。このことから、好きな者への援助は、比較的長い時間のオーダーを仮定すると、Weiner (1986) の示唆する自己帰属過程によって維持されるが、嫌いな者への援助は自己帰属過程によって抑制されると考えられる。また、原因を不安定的に帰属することは、将来同じ結果を期待しないことにつながるの、嫌いな者への非援助は維持され、好きな者への非援助は抑制されると考えられる。このような原因帰属と行為の連鎖におけるポジティブ・フィードバックの関係から、対人感情が行為に及ぼす影響がますます強化されてゆくと考えられる。

また、本研究では、対人感情の原因帰属に及ぼす効果において、肯定的感情と中性的感情との差異よりも否定的感情と中性的感情との差異の方が明らかに大きいことが認められた。本研究における対人感情の操作が成功しているとするれば、この結果は、嫌悪的感情を持つ人物への行為の原因帰属が他の人物への行為の原因帰属に比して特異的であることを示唆するものである。Kahneman & Tversky (1979) は、報酬のような肯定的な事象の予期よりも損失のような否定的な事象の予期の方が意思決定過程に及ぼす影響が大きいことを説いているが、このことは、対人感情に関しても言えるようである。嫌悪的感情という否定的感情の方が肯定的感情よりも強い効果を持つことは、竹村 (1988) の援助行動意図に関する実験でも確認され、また、本研究の原因帰属に関する研究においても確認されている。

本研究では、高木 (1982) の援助状況の分類研究を参考に、緊急状況と非緊急状況を取り上げ、状況要因の効果を検討し、また、潜在的援助者や潜在的被援助者の性の要因の効果も加えて検討した。まず、状況の主効果は、援助行動の場合にのみ認められ、緊急状況の援助行動が、

非緊急状況の援助の援助行動に比して、安定的・統制可能・一般的な原因に基づいていると知覚されていることが明らかになった。本研究で取扱った2つの状況は、高木 (1982) の見出した援助出費、個人的規範、社会的規範の3次元の値が一方は高く、他方は低いという関係になっている。3次元の値が共変しているために、これらの3次元のうちどの次元が状況の效果に寄与しているのかが明らかでない。したがって、今後は、状況の種類を増やしてどの次元が状況の效果に寄与するのかを明らかにする必要がある。

また、潜在的援助者と潜在的被援助者の性の主効果は、援助行動の場合にのみ認められ、潜在的被援助者が女性の場合に一層安定的な原因に援助行動に基づいていると知覚されていることが明らかになった。潜在的被援助者が女性の場合により安定的な原因に援助行動が帰属されるということは、先の Weiner (1986) の安定性に関する帰属過程についての説明を考慮に入れると、女性が男性よりも援助されやすいという研究知見 (Eagley & Crowley, 1986) と一致する。すなわち、安定的と帰属される行為は維持される傾向にあり、また、維持され続けている行為は安定的な原因に帰属されると考えられるからである。

最後に、本研究の結果が示したように、対人感情は、状況要因や潜在的援助者や潜在的被援助者の性などと相互作用して原因帰属に影響を与えることも認められた。また、個々の交互作用の効果はあまり強くなくとも、各交互作用効果の総和は、説明分散のかなり多くの割合を占めていた。このことから、対人感情が援助行動ならびに非援助行動の原因帰属に与える影響を考える場合、状況的要因、潜在的援助者や潜在的被援助者の性の要因などとの相互作用を無視できないと考えられる。

要 因

本研究は、潜在的被援助者に対する肯定的 (好意的) 感情や否定的 (嫌悪的) 感情が潜在的援助者の援助行動ならびに非援助行動の原因帰属にどのような影響を及ぼすかを検討することを主目的にした。さらに、本研究では、緊急状況と非緊急状況という援助状況の性質、潜在的援助者の性、潜在的被援助者の性などの要因の効果も加えて検討した。なお、本研究で取上げた原因帰属の次元は、統制の所在 (locus of control)、安定性 (stability)、統制可能性 (controllability)、一般性 (globality) の4つの次元であった。

本研究は、3 (対人感情: 肯定的, 中性的, 否定的) ×

2 (状況：緊急，非緊急)×2 (潜在的被援助者：男性，女性)×2 (潜在的援助者：男性，女性)の4要因の被験者間実験計画であり，168名の大学生男女を各群に無作為に配置した。各群の被験者は，高木(1983, 1987)が被験者の自由記述から選定した25種類の援助動機および26種類の非援助動機に回答するように教示され，竹村・高木(1987)の求めた各項目にかかる各原因帰属次元のウェイトを被験者の評定値に掛合わせることによって各原因帰属次元得点が算出された。

得られた主要な知見は以下のとおりである。

1. 対人感情が援助行動および非援助行動の原因帰属に及ぼす影響は，他の要因の効果よりも比較的大きかった。援助行動においては，潜在的被援助者に肯定的感情を抱いている場合や中性的感情を有している場合は，潜在的被援助者に否定的感情を抱いている場合に比して，援助行動が内的・安定的・一般的な原因に基づいていると一層知覚されていることが認められた。また，非援助行動においては，潜在的被援助者に肯定的感情を抱いている場合や中性的感情を有している場合は，潜在的被援助者に否定的感情を抱いている場合に比して，非援助行動が外的・不安定的・統制不可能的・特殊的原因に基づいていると一層知覚されていることが認められた。

2. 状況の主効果は，援助行動の場合にのみ認められ，緊急状況の援助行動が非緊急状況の援助行動に比して，安定的・統制可能・一般的な原因に基づいていると一層知覚されていることが明らかになった。

3. 潜在的援助者と潜在的被援助者の性の主効果は，援助行動の場合にのみ認められ，潜在的援助者が女性の場合に一層一般的な原因に，潜在的被援助者が女性の場合に一層安定的な原因に援助行動が基づいていると知覚されていることが明らかになった。

4. 対人感情が，状況要因や潜在的援助者や潜在的被援助者の性などと相互作用して原因帰属に影響を与えることも認められた。このようなことから，対人感情が援助行動ならびに非援助行動の原因帰属に与える影響を考える場合，状況的要因，潜在的援助者や潜在的被援助者の性の要因などとの相互作用を無視できないことが指摘された。

引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E., & Teasdale, J. 1978 Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- Baron, R. A. 1971 Behavioral effects of interpersonal attraction: Compliance with requests from liked and disliked others. *Psychonomic Science*, 25, 325-326.
- Bar-Tal, D. 1976 *Prosocial behavior: Theory and research*. New York: Halsted Press.
- Berscheid, E. 1985 Interpersonal attraction. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.), *Handbook of social psychology*, Vol. 2. New York: Random House. Pp. 413-484.
- Eagley, A. H., & Crowley, M. 1986 Gender and helping behavior: A meta-analytic review of the social psychological literature. *Psychological Bulletin*, 100, 283-308.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫(訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- Kahneman, D., & Tversky, A. 1979 Prospect theory: An analysis of decisions under risk. *Econometrica*, 47, 263-291.
- Latané, B., & Darley, J. M. 1970 *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton-Century-Crofts. (竹村研一・杉崎和子(訳) 1977 冷淡な傍観者 — 思いやりの社会心理 — プレーン出版)
- 中村陽吉・高木 修(編著) 1987 「他者を助ける行動」の心理学 光生館
- Regan, D. 1971 Effect of a favor and liking on compliance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 627-639.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1-28.
- Rosenbaum, R. M. 1972 A dimensional analysis of the perceived causes of success and failure (Doctoral Dissertation, University of California, Los Angeles). *Dissertation Abstracts International*, 33, 5040B.
- 斎藤 勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 222-228.
- 斎藤 勇 1986 対人感情と対人行動と情緒の関連 心理学研究, 57, 137-156.
- 高木 修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, No. 23, 137-156.

- 高木 修 1983 順社会的行動の動機の構造 年報社会心理学, No. 24, 187-207.
- 高木 修 1987 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学社会学部紀要, 19 (1), 27-49.
- 高木 修・竹村和久 1984 援助動機と非援助動機の関連性について 関西大学社会学部紀要, 16 (1), 51-65.
- 竹村和久 1988 対人感情が援助行動意図に及ぼす効果 日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 44-45.
- 竹村和久・高木 修 1987 援助行動及び非援助行動における原因帰属の次元 実験社会心理学研究, 27, 15-25.
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, 71, 3-25.
- Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion*. New York: Springer-Verlag.
- Weiner, B., Frieze, I. H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. 1971 *Perceiving the cause of success and failure*. Morristown, N. J.: General Learning Press.

〔1990年5月5日 受稿〕
〔1990年8月24日 受理〕